

当科における口腔粘膜疾患の臨床統計的検討

桑 島 広太郎 毛 利 謙 三 田 中 四 郎
江 原 雄 一 兼 松 宣 武

The Statistical Examination of Oral Mucosal Disease

KUWAJIMA KOTARO, MOURI KENZO, TANAKA SHIRO,
EHARA YUICHI and KANEMATSU NOBUTAKE

今回われわれは、1997年4月から2004年3月までの過去7年間に当科を受診した口腔粘膜疾患患者460例の臨床統計的検討を行った。口腔粘膜疾患に罹患した患者は男性225例、女性235例で女性のほうが多かった。年齢分布は50歳代にもっとも多く、次いで10歳未満、60歳代の順であった。疾患別に分類すると、舌炎などの炎症性疾患が105例(22.8%)と最も多く、次いで線維腫などの良性腫瘍102例(22.2%)、粘液瘤などの嚢胞74例(16.1%)、角化性病変59例(12.8%)、奇形35例(7.6%)、外傷33例(7.2%)、アレルギー性疾患28例(6.1%)、悪性腫瘍23例(5.0%)、エプーリス20例(4.3%)の順であった。

口腔粘膜疾患の種類は多岐にわたっており、疾患によって好発年齢などに特徴が認められた。

キーワード：口腔粘膜疾患，臨床統計

The conditions that occur in the oral mucosa are various. We compiled and examined statistics on oral mucosal diseases with the intention of understanding the features of the diseases. Here, we report our findings.

The subjects of our investigation were 460 patients with oral mucosal disease who consulted our department in the past 5 years, between April 1997 and March 2004. There were 225 male patients, and 235 female patients. Most of the patients were in their 50s, and the other at least 60 years old. The oral mucosal diseases were classified as follows: inflammation such as inflammation of the tongue accounted for the most cases, 105 cases (22.8%), followed by 102 cases (22.2%) of benign tumors such as fibroma, and 74 cases (16.1%) of cysts such as mucocele, 59 cases (12.8%) of hyperkeratotic lesions such as a leukoplakia and Lichen planus, 35 cases (7.6%) of trauma, 33 cases (7.2%) of deformity, 28 cases (6.1%) of allergy, 23 cases (5.0%) of malignant tumors, and 20 cases (4.3%) of epulis.

There are many kinds of oral mucosal diseases, and we can observe the features in patients at the ages at which the diseases occur most often.

Key words: Oral mucosal disease, Statistical examination

緒 言

口腔粘膜は直接に物理的・化学的刺激を受けやすく、口腔粘膜疾患の臨床病態像も多種多様であるため¹⁾、診断や治療に苦慮することが多い。そこで今回われわれ

は口腔粘膜疾患の特徴を把握することを目的として、朝日大学歯学部附属病院歯科口腔外科を受診した新来患者の口腔粘膜疾患について、臨床統計的検討を行ったので報告する。

朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野
501-0296 岐阜県瑞穂市穂積1851

Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Division of Oral
Pathogenesis and Disease Control

Asahi University School of Dentistry
Hozumi 1851, Mizuho, Gifu, 501-0296, Japan

本論文の要旨は、第27回口腔外科学会中部地方大会(平成14年7月6日、三重)において発表した。

対象及び方法

対象は1997年4月から2004年3月までの7年間に朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野(歯科外科学)を受診した新来患者7,929名である。これら新来患者の中で、口腔粘膜の異常を主訴とした患者を抽出し、その臨床診断を疾患別に分類した。疾患分類は1972年WHOより発行された「The dental application of the disease (8th revision)」をもとに、口腔粘膜に発生した炎症性疾患、良性腫瘍、嚢胞、角化性病変、奇形、外傷、アレルギー性疾患、悪性腫瘍、エプーリスの9項目に分類し調査した。

結 果

口腔粘膜の異常を主訴に来院した新来患者数は7,929症例中460症例であり、当科における口腔外科的疾患初診患者の6.1%を占めていた。その男女差は男性225例(48.9%)、女性235例(51.1%)でやや女性の方

が多い傾向にあった(図1)。

口腔粘膜疾患の内訳としては、舌炎や口内炎などの炎症性疾患が105例と最も多く全体の22.8%を占め、次いで頬粘膜の線維腫などの良性腫瘍が102例(22.2%)、粘液瘤などの嚢胞性疾患が74例(16.1%)、白板症、扁平苔癬などの角化性病変が59例(12.8%)、舌小帯異常などの奇形が35例(7.6%)、口唇裂傷などの外傷が33例(7.2%)、金属アレルギーなどのアレルギー疾患が28例(6.1%)、舌の扁平上皮癌などの悪性腫瘍が23例(5.0%)、エプーリスが20例(4.3%)であった(図2)。

また、口腔粘膜疾患患者の年代別分布で、最も頻度の高かったのは50歳代で89例(19.3%)、次いで10歳未満の74例(16.1%)、60歳代の67例(14.6%)の順であった(図3)。なお、50、60歳代では線維腫などの良性腫瘍や舌炎などの炎症性疾患が多くみられた。これに対し、10歳未満では、舌小帯強直症などの先天異常や粘液嚢胞などの嚢胞性疾患が多く認められ、他の年齢層とは異なっていた。

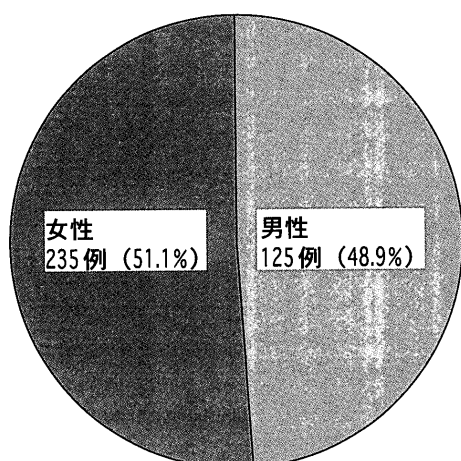


図1 口腔粘膜疾患患者の性差

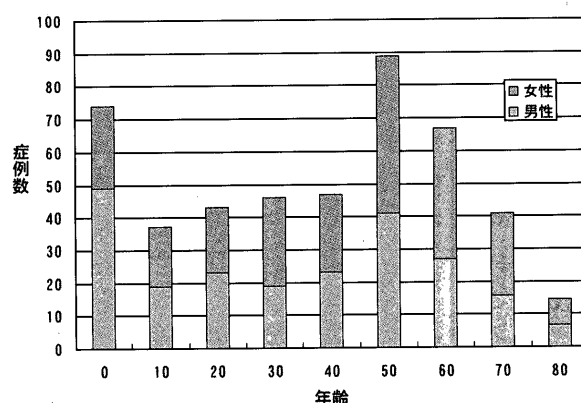


図3 口腔粘膜疾患の年代別分布

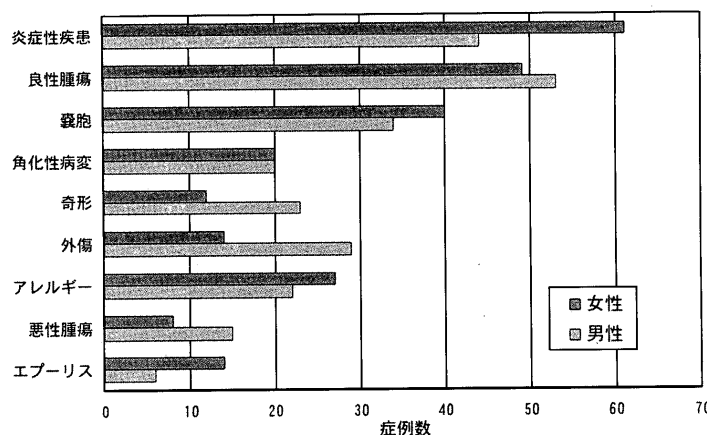


図2 口腔粘膜疾患の内訳

疾患別分布としては、今回最も多く見られた炎症性疾患では、アフタ性口内炎を含む口内炎が最も多く42例(40.0%)、次いで舌炎40例(38.1%)であった。また、カンジダやヘルペスウイルスなどの感染症は15例(14.3%)にみられ、その内訳はカンジダ症5例、ヘルペス性口内炎5例、帯状疱疹ウイルス感染症3例、その他2例であった。

症例数が多くその病態も様々な良性腫瘍の内訳は、男性、女性ともに線維腫が最も多く認められた(57例, 55.9%)。次いで血管腫(16例, 15.7%)、乳頭腫(16例, 15.7%)、脂肪腫(5例, 4.9%)の順であった(図4)。良性腫瘍では、50歳代が21例(20.6%)と最も多く発現し、次いで40歳代及び60歳代でそれぞれ18例(17.6%)発現した(図5)。

嚢胞においては、全ての症例が粘液貯留嚢胞で10歳代に最も多く認められ(20例, 27.0%)、次いで10歳未満(14例, 18.9%)、30歳代(11例, 14.9%)、20歳代(10例, 13.5%)の順に多くみられ、40歳代以降減少する傾向にあった。

口腔粘膜の角化病変のうち、前癌病変として注意が

必要な白板症は21例(4.6%)に認められた。悪性腫瘍が60歳代に最も多く認められたのに対し、白板症は50歳代において9例(42.9%)と最も多く認められた。男女差は、男性11例(52.4%)、女性10例(47.6%)と男性の方がやや多く見られた(図6)。白板症の発生部位は歯肉と舌が、それぞれ8例(38.1%)、7例(33.3%)と多く認められた(図7)。病理組織所見では、上皮の過角化が認められたもの10例(47.6%)、上皮の肥厚が認められたもの8例(38.1%)、基底細胞層に細胞異形性が認められたもの3例であり、白板症全体の14.3%であった(図8)。

また、難治性疾患である扁平苔癬は50歳代に最も多く認められ(8例, 42.1%)、次いで70歳代(5例, 26.3%)、60歳代(4例, 21.1%)の順であった(図9)。その発生部位は頬粘膜に最も多く(14例, 73.7%)、次いで舌(3例, 15.8%)の順であった(図10)。

外傷の損傷部位は、口唇が最も多く(13例, 39.4%)、次いで舌(9例, 27.3%)の順であった。年齢別分布では、10歳未満に最も多く見られた(16例, 48.5%)。

奇形の内訳としては舌小帯の異常が27例(77.1%)と

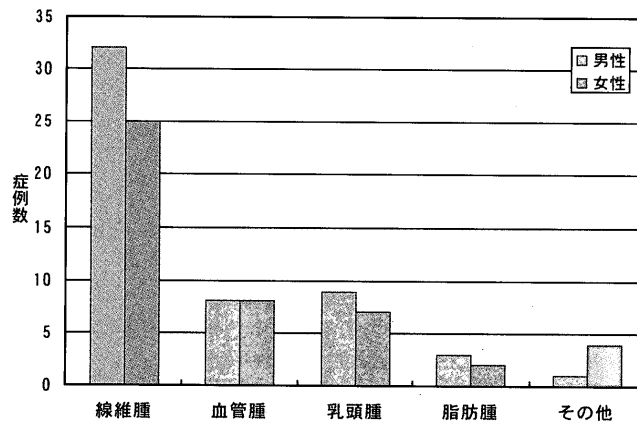


図4 良性腫瘍の内訳

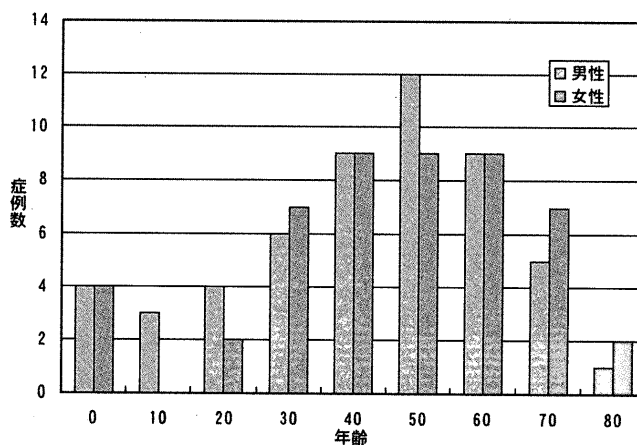


図5 良性腫瘍の年代別分布

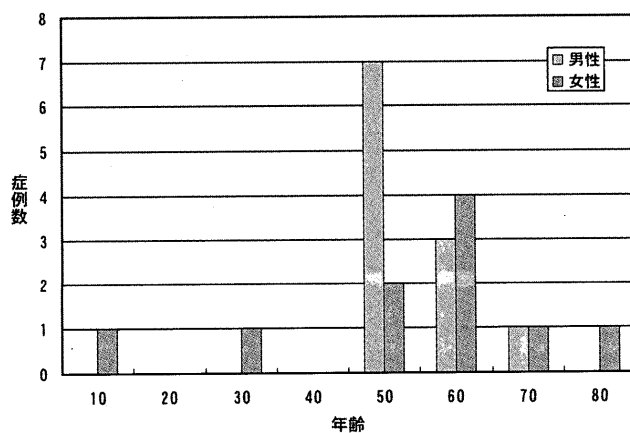


図6 白板症の年代別分布

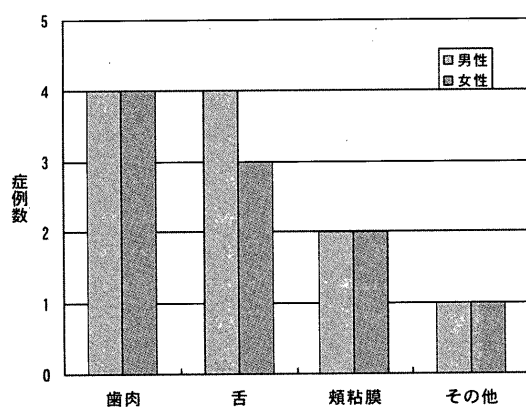


図7 白板症の発生部位

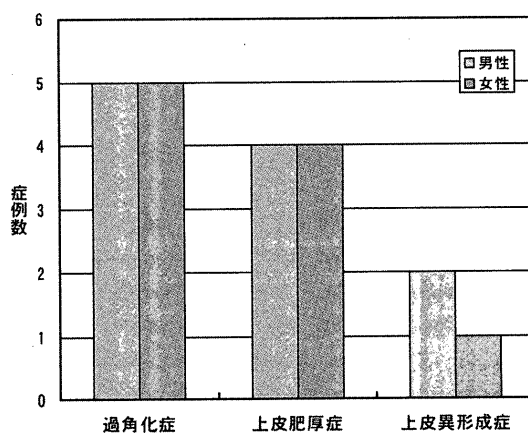


図8 白板症の病理所見

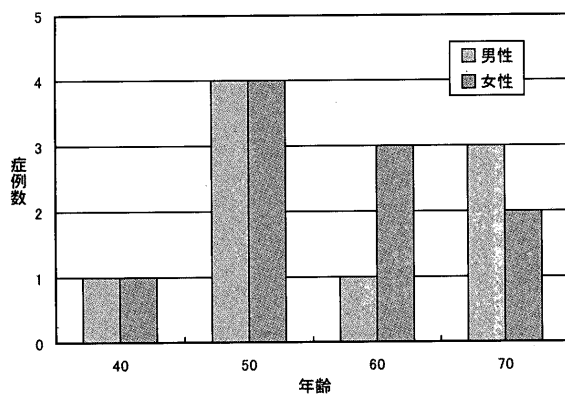


図9 扁平苔癬の年代別分布

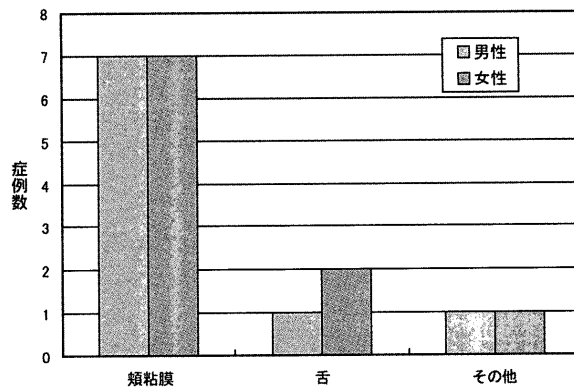


図10 扁平苔癬の発生部位

大部分を占め、次いで上唇小帯の異常が7例(20.0%)認められ、そのほとんどが10歳未満に見られた(30例, 85.7%)

アレルギー性疾患では、金属アレルギーが23例(82.1%)と大部分を占め、それ以外ではQuincke浮腫(5例, 17.9%)が認められた。年齢別分布では50歳代

の特に女性に最も多く認められ(10例, 35.7%), 全体の男女比としても1:1.55と女性に多く認められた。

口腔粘膜疾患の中で最も治療に苦慮する悪性腫瘍は、23例(5.0%)に認められ、そのほとんどは扁平上皮癌であり、それは60歳代の男性に最も多く(6例, 26.1%), 次いで50歳代の男女および40歳代の男性(3

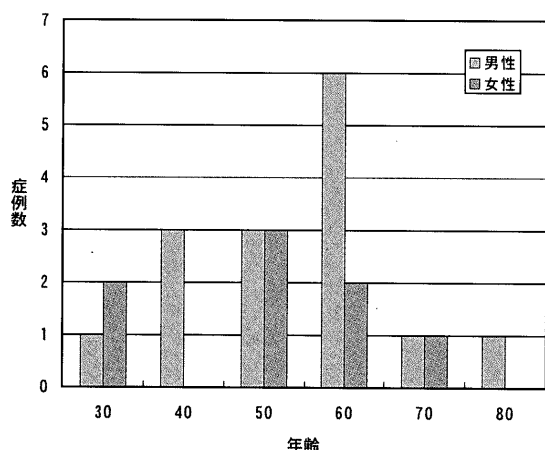


図11 悪性腫瘍の年代別分布

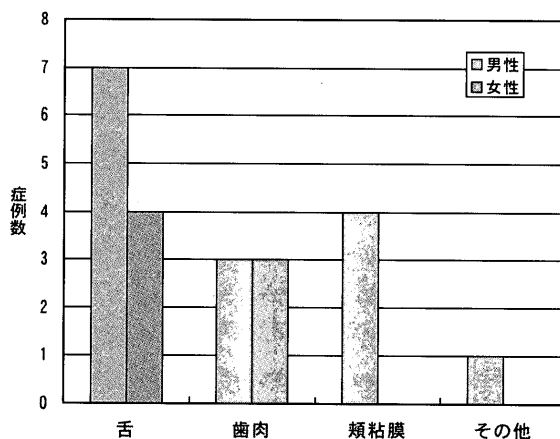


図12 悪性腫瘍の発生部位

例, 13.0%)に多く発現した(図11)。なお, 部位別では, 舌に最も多く発生し(11例, 47.8%), 歯肉(6例, 26.1%), 頬粘膜(4例, 17.4%)の順であった(図12)。

歯肉の炎症性, 反応性の増殖物であるエプーリスは, 女性に多く見られ, その性差比は約1:2であった。組織学的に最も多く認められたのは, 線維性エプーリス(10例, 50.0%)で, 次いで肉芽腫性エプーリス(6例, 30.0%), 血管腫性エプーリス(3例, 15.0%), 骨形成性エプーリス(1例, 5.0%)であった。最も多く認められた年齢は50歳代であった(5例, 25.0%)。

考 察

口腔粘膜疾患とは, 口腔粘膜に発生する全ての疾患を包含する²⁾。したがって, 通常の疾患分類である炎症, 腫瘍, 先天異常, 外傷などのうち口腔粘膜に何らかの変化を示すものは全て含まれ, 口腔粘膜固有の疾患のみならず, 皮膚疾患と関連のある疾患や全身疾患の部分症状と認識すべき疾患もある。そのため, 今回の調査では, 口腔粘膜に何らかの異常を主訴として当科を受診した全ての新来患者を調査対象とした。

全新来患者7,929名のうち口腔粘膜の異常を主訴として来院した患者は460名で全体の5.8%を占めていた。飯久保ら³⁾の報告では8.8%とされており, われわれもほぼ同様の結果であった。

男女差においては, 男性225名, 女性235名で女性の方がやや多い結果となった。また疾患による性差も認められ, 炎症性疾患, 嚢胞, アレルギー性疾患は女性に多く, 外傷, 悪性腫瘍では男性に多い傾向にあった。

各疾患別にみると, 炎症性疾患は舌炎, アフタ性口内炎, 口角炎などがあり, 50歳代から70歳代において多く見られ, 全ての年齢層において女性の方が多かった。これは, 鉄欠乏性貧血などの血液疾患が女性に多いことや, 更年期におけるホルモンのバランスの欠如など

が影響を及ぼしているものと考えられた。

良性腫瘍においては線維腫, 血管腫, 乳頭腫などが多く認められ, 好発年齢は50歳代60歳代であった。この年代は歯周病等により歯牙が喪失し, 部分床義歯など, 義歯の装着が必要となってくる。そのため, 義歯による慢性的な口腔粘膜への刺激により, 線維腫などが多く発症したのではないかと考えられた。

嚢胞は, 粘液貯留嚢胞が最も多く見られ, 30歳代までに多く見られ, 加齢とともに減少する傾向にあった。これは, 若年者における頬粘膜や口唇の誤咬や, 歯列不正による粘膜組織への刺激のためと考えられた。

白板症は, 代表的な前癌病変として知られ, その悪性化率は4~5%といわれている^{4,5)}。さらに, 舌癌の約18%に白板症が先行しているとの報告もある⁶⁾。今回の調査では, 白板症は口腔粘膜疾患の約5%であり, また50歳代から60歳代に多く, 発生部位においては舌, 歯肉に多く見られ, 渡辺ら⁷⁾の報告とほぼ同様の結果であった。また, 病理組織診断にて上皮内に異形成を認めた症例は21例中3例と全体の14.3%で, そのうち70%が舌に発生していた。このことより, 舌に発生した白板症はすでに上皮内に異形成を起こしている可能性が高く, 早期の処置が必要であると考えられた。

白板症と同様に白色病変として発生する口腔扁平苔癬は, 50歳代以降の女性に多く見られた。発生部位は頬粘膜に多く認められた。一般に扁平苔癬は悪性化することが少ないといわれているが, 一方では1~3%は悪性化すると報告されている⁸⁾。また, 仲屋ら⁹⁾によると観察期間が長くなるほど悪性化率が高くなるといわれており, 慎重に経過観察する必要があると思われる。

外傷は10歳未満の若年者に多く見られ, 口唇部, 舌部に多く見られた。これらの原因の多くは転倒等による損傷であった。

奇形では、舌小帯の付着位置異常が最も多く見られ、また10歳未満の若年者に多く見られた。これは、保護者が発音異常などに気づき、それを主訴に来院することが多いためであると考えられた。

アレルギー性疾患は、金属アレルギーが最も多く、50歳代以降に多く認められた。これは50歳代以降の口腔内には、金属の充填物や金属冠が装着されていることが多いためであると考えられた。またQuincke浮腫は40歳代の女性に多く見られ、これは城徳ら¹⁰⁾の報告と同様の結果であった。

悪性腫瘍では、50歳代と60歳代の男性に特に多く見られた。これは青木¹¹⁾らの報告とほぼ同様の結果となった。原因としては喫煙、飲酒などの生活習慣が影響しているものと考えられた。

エプーリスは、その男女比が1:2と女性に多く、また病理組織学的には線維性エプーリス、肉芽腫性エプーリスが大部分を占め、石田らの報告¹²⁾と同様であった。しかしながら好発年齢は50歳代であり20~40歳代とする石田らの報告とは異なっていた。

結 論

1997年4月から2004年3月までの期間に朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野(歯科外科学)を受診した患者の中で、口腔粘膜の異常を主訴とした患者について、その診断結果を基に調査を行った。

- 1) 全新来患者の中で口腔粘膜疾患は口腔外科的疾患の約6%であり、女性にやや多く認められた。
- 2) 口腔粘膜疾患の内訳としては炎症性疾患、良性腫瘍、嚢胞、角化性病変、外傷、奇形、アレルギー、悪性腫瘍、エプーリスの順に多く見られた。また、疾患によって性差が見られた。
- 3) 疾患別による好発年齢には差がみられた。奇形、嚢胞は若年者に、悪性腫瘍、白板症、扁平苔癬などの治療に苦慮する疾患は50歳以上に多く認められた。

参 考 文 献

- 1) 宮崎 正:口腔外科学(松矢篤三, 白砂兼光編), 2版, 医歯薬出版(東京), 177~196, 2000.
- 2) 榎本昭二, 作田正義:口腔粘膜疾患の診断, 1版, 医歯薬出版(東京), 21~26, 1986.
- 3) 飯久保正弘, 笹野高嗣, 栗原直之, 犬飼 健, 小野寺大, 仲島一郎, 駒井伸也, 庄司憲明, 菅原由美子, 佐藤しづ子, 古内 寿, 坂本真弥, 高橋和裕, 丸茂町子, 三條大助:口腔粘膜疾患の臨床統計—第3報 過去5年間の当院新来患者について—. 日口誌, 10:46~52, 1997.
- 4) 藤井英治, 六島聡一, 宮倉 毅, 長澤宏和, 鈴木鉄夫, 山城正司, 山田隆文, 天笠光雄, 高木 実:口腔白板症の悪性化—口腔白板症576症例の臨床病理学的研究—(抄). 日口外誌, 43:1065, 1997.
- 5) 高野正行, 柿澤 卓, 松井 隆, 山 満, 国府田英敏, 川上幸恵, 野間弘康, 井上 孝:口腔白板症の癌化に関する臨床病理学的研究(抄). 日口外誌, 43:1066, 1997.
- 6) 西山茂夫:口腔粘膜疾患アトラス, 1版, 文光堂(東京):207~210, 1998.
- 7) 渡辺祥樹, 清水正嗣, 松本有史, 京極順二, 水城春美, 柳澤繁孝, 小野敬一郎, 花井 康:白板症と臨床診断された67症例の臨床病理学的検討. 口科誌, 41:563~570, 1992.
- 8) 西山茂夫:口腔粘膜疾患アトラス, 1版, 文光堂(東京):70~75, 1998.
- 9) 仲屋正樹, 関口 隆, 篠原久幸, 中館 敬, 松田博之, 本間清史, 永井 格, 小浜源郁:口腔粘膜疾患624例の臨床的検討. 日口外誌, 41:863~865, 1995.
- 10) 城徳美希, 新谷 悟, 宝田 学, 福住雅州, 浜川裕之:クインケ浮腫の臨床統計学的検討. 口科誌, 50:377~380, 2001.
- 11) 青木伸二郎, 川辺良一, 小澤知倫, 露木良治, 大口ひとみ, 平田雅嗣, 渡貫 圭, 藤田浄秀:悪性腫瘍の臨床統計的検討—第1報:患者動向—(抄). 口科誌, 50:402, 2001.
- 12) 石田 武, 長谷川清, 小川裕三, 吉岡千尋, 青葉孝昭, 八木俊雄:エプーリスの分類と自験例160例の集計観察. 口科誌, 30:14~23, 1981.